

日本仏教に於ける

戒律の研究

石田瑞磨著

日本仏教には戒律軽視の傾向があり、研究面にもそれがあらわれていたが、著者は戒律を正しく捉える必要を認め、その全史を通して戒律の實際を明らかにしようとして、この著作には、日本仏教傳來以後、鎌倉仏教までを扱っている。尤も親鸞・道元・日蓮については稿を改めるべきものとして、ここには扱わない。

まず日本仏教の戒律は、鑑真のもたらした南都戒と、最澄によって始められた天台菩薩戒の伝統の二大潮流があるが、それらについて歴史的展開の跡づけを背景に、その實際を明らかにしようとしてゐる。

鑑真の戒律は、かって指摘されたような瑜伽戒とするのは無理で、鑑真は四分律宗を受けた戒律の明匠であり、同時に天台の学匠であったことを注目すべき

で、それは鑑真の戒律を解く鍵でもあり、又、梵網経への関心もうかがわれるという。

最澄の円頓戒提唱は、歴史的諸契機を媒介としなされたものであり、南都との諸論争の根幹も戒律にある。又、最澄の円戒は智顛の円戒が法華円教の実相觀に立ち、箇々の戒相を包括し、それを超えるものであるに比し、法華開会を許さぬ梵網戒中心で、小戒を否定する。天台宗学でいう「正依法華傍依梵網」とは最澄の真意に遠くと論じてゐる。

次に最澄以後、光定・円仁・円珍・安然の円戒思想、法然の戒律觀、鎌倉期の円戒、南都戒の再興、律宗復興について、以上詳細に述べた勞作である。

(百七)

A 5 版 559頁 昭和38年3月発行

Christianity and the Encounter
of the World Religions

by Paul Tillich

(Columbia University Press
New York and London 1963)

本書は、Columbia 大学で一九六一年の秋に四回にわたって行われた The Bampton Lectures の講義録を後に著者自身が手を加え、それを出版したものである。したがって四章に分けられ、それぞれの章に次のような内容を示す表題が付されてゐる。

1. A View of the Present Situation: Religions, Quasi-Religions, and Their Encounters.
2. Christian Principles of Judging Non-Christian Religion.
3. A Christian-Buddhist Conversation.
4. Christianity Judging Itself in the Light of Its Encounter with the World Religions.

著者の序文に述べられているように、この書を中心とする主題は、一つの重要な問題の提起を試みたものである。それは文化現象の根底に横たわる宗教的なものの相互の出会い (encounter) に起つてゐる状況に、如何に対処すべきかと問ふことである。勿論その宗教的なものは、著者の持論である究極的関心事 (ultimate concern) によつて捉えられた存在の状